広島大会 企画ワークショップ１のご報告

「多様で持続可能な対人援助に必要な『知』について」

企画・話題提供　本間たけし　（退院支援研究会 新潟）
討論者：村本邦子（立命館大学教授）　中村正（立命館大学教授）

【序文】

今回取り上げる、第 15 回大会の「企画ワークショップ 1」では、まず私から企画の概要をプレゼンテーションし、次に立命館大学の村本邦子教授と同大中村正教授からご発言を頂いた。その後、参加者全員による「バズ・セッション」を行い、代表者が話しあった内容を発表した。以下に、本間、村本先生、中村先生、代表者から A、B、C３氏の発言を記す。紙面の都合で発言を掲載出来なかった方々には、心よりお詫び申し上げます。プロローグ以下の参考・引用文献の詳細は各号の巻末に記す。

【プロローグ】

本間のプレゼンテーション

私は、新潟から来た整形外科・リハビリテーション科の医師です。昨年、私ども退院支援研究会は、「新潟水俣病と私たち」を主題に第 14 回大会を主催しました。「水俣を見ずして、水俣病を語るなかれ」と多くの関係者に言われました。ならばと、今年の夏に水俣で開業している同級生を頼って、熊本県水俣市を訪れた時の写真をお示しします。これから「多様で持続可能な対人援助に必要な『知』について」と題し、中村正先生、村本邦子先生、そして参加者の皆さんと一緒に考えたいと思います。

まず、J.ハーシーの著書『ヒロシマ』を紹介します。原爆が投下された翌1946年4月、著者は 3 週間に亘って広島を取材し、ウイルヘルム・クラインゾルゲ神父と谷本清牧師ら、6 人の市民の「原爆症との戦いと社会生活」を、主観を排除して書き上げました。本書は、世界に原爆の惨禍を知らしめ、原水爆禁止や核廃絶運動にも影響を及ぼしました。ハーシーの通訳兼ガイドは、作中に登場するクラインゾルゲ神父が担当し、邦訳は谷本清牧師らによってなされました。

和歌でいえばハーシーへの「返し歌」として、G.バタイユは『ヒロシマの人々の物語』（1947 年）を書き、広島の無辜の民が「火を投げ込まれた蟻塚の蟻」のように焼かれ、逃げ惑う様子を「動物的」と、トルーマン大統領の声明を「人間的」と表現しました。広島の人々が「事前の警告や考える暇もなく動物のように毀損され」、かの大統領は「離れた場所から政治的な思惑や自己の正当性を強調し、相手を屈服させるため」の声明を出したという意味に私は解釈しました。バタイユは、「Acéphale（無脳人）」という私的結社を結成し、同名の雑誌を 1936 年に創刊、自らの文化的活動の場としました。一方で民衆に向け、「理性」の束縛や、全体主義の「指導者」への狂信的な信仰から自由になるよう警鐘を鳴らしました。

「防空業務従事令書」により地方への疎開を禁じられていた広島の医療者は、例を挙げると医師・歯科医師の半数 150 名に相

当する医師のうち約 70 名が即死しました。生き延びはしましたが、自らも被爆した広島の医療者は、原爆投下直後から、機材や薬品が底をつく中、夥しい数の患者を治療しました。彼らは、後に「原爆症」や「放射能症」と呼ばれる前例は無いが、病期や病状に一定の傾向がある病態に気づいていました。「原爆症」に関する医学的情報の不足と GHQ による初動調査結果の秘匿、情報統制（プレスコード）は、7 年後の占領終了まで医療者と被爆者を苦しめ、被爆者への監視は日本政府に託されて、被爆者の「孤立」を深めました。（ハーシー）

井伏鱒二は名著『黒い雨』の中で、米国原子爆弾傷害調査委員会 ABCC について主人公に苦々しい思いを述べさせています。
また三島由紀夫は、『小説家の休暇』（1955 年）で、「1954 年の第五福竜丸事件において、アメリカは被害者たちに賠償ではなく「好意による見舞い」として 200 万ドルを支払い、日本政府もこれを容認した。それは知的で概観的な世界像に直面している人間が、自分の中のそういう世界像と無縁な部分に慈悲を垂れるという、人間一般の内部の問題であると捉え、現代の不可思議な特徴は、感受性より理性の方が人を狂信に導くことであると指摘しました。

1980 年 12 月に交付された「原爆被害者対策基本問題懇談会（基本懇）」答申は、「被爆地の指定は原爆投下による放射線量の調査結果など、科学的根拠に基づいて合理的に行わなければならない」と定め、被爆者の認定や援護の拡大の前に立ち塞がる壁となり、被害者への差別や分断を招きました。占領軍は原爆投下後の初動調査を妨害し、プレスコードを敷き、それを日本政府が後押して、日米の政府が秘匿した「科学的合理的な根拠」を、被爆者に提示するよう求めるのは理屈に合わないことです。「宇田論文」には、原爆投下直後に気候測定機器がなかった爆心地周辺を、広島管区気象台の OB 宇田ら 6 人が、徒歩や自転車で 120 人ほどの住民から、聞き取りや手記・日記を参考に作成した雨域図が記されています。後に、「黒い雨」にあった被害者の「3 号被爆者」（救護被爆者）としての認定や、援護区域の拡大を議論する場で、国は「基本懇答申」の科学性・合理性の根拠としてこの「宇田論文」を挙げ、調査対象者数と調査域を大幅に拡大した「増田雨域図」や「大瀧雨域図」の科学性を否定しました。（小川）

大江健三郎は、原爆を投下する直前の連合国側には、原爆の巨大な悪にバランスをとれるだけの「広島」の人々の人間的な善の努力により、この武器の悪魔的性格を人間が希望を見出しうる限界のこちら側まで緩和されるだろうという「予定調和信仰風な打算」があったと考えました。「科学で生じた問題は、さらなる科学の発展でいつか解消できる」というレトリックに対抗しうるのは、「倫理」を遵守しようとする「世界精神」を持ち続けようとする姿勢でしょう。（中村、ヘーゲル）

GHQ による情報統制下では、国側も科学的な判断を下すのは困難だったはずです。であれば、「分からないものは、分からない」という共通の認識のもと、「当事者の証言を直視し、救済の対象者を特定、補償も被害者が納得できる内容にするべきである」という、広島地裁・高裁の判断は極めて妥当なものです。（小川）　対人援助においても、クライエントの多様なニーズに対しては、「制度

の限界」や「前例の踏襲」に固執せず、「判断が難しいことは、難しい」という前提で、援助側とクライエント、双方が許容できる「妥協点」を見出す方が現実的です。

「成果追求」という理性に束縛された援助者は、それに応えるため、課題を直線的な因果関係のうちに捉え、クライエント不在のまま画一的な援助を提案してしまうことがあります。次の援助者も、「事前情報」という先見に囚われると修正の機会を逸し、納得できる「現実的な妥協点」へ到達することが難しくなります。援助がどのような道筋や理由で「妥協点」から逸脱して行くのか。「理性」からその答えは見つかりません。自他の「感性」（例；快・不快）を信じることが大切なのです。（石川、箒木）

対人援助において、援助者側の「経験と知識」がクライエントの「感性や知性」に勝るとは限りません。我々は援助の方向性を失いパニックに陥り、無関心を装い思考を停止してはなりません。クライエントとの精神的な距離やコミュニケーションを思慮し、自分の援助が相手の希望を損ない、屈服させようとする「専門家暴力」になっていないか配慮すべきです。（フーコー、バタイユ）

科学が軽視した現実は、「生命現象」と「対象との関係性」、つまり「生活世界」です。現実や現場からの近代科学の「立ち遅れ」は、文明と地球の危機につながる環境と生態系の破壊をもたらしました。この「立ち遅れ」を、「優位さ」と誤解している人は少なくないかも知れません。援助行為に於いては科学性も必要ですが、人格を有する主体同士の関係性と、「契約」ではなく「合意」によるパートナー・シップを第一と考えるべきです。（中村、フッサール）

最近の医療界では、EBM(根拠に基づく医療)の重要性が強調され、弱者への配慮が進み、チーム・アプローチの重要性が見直されています。しかし、利便性を高めるはずのICT（情報とコミュニケーションのツール）はクライエントとの接点を狭め、依拠する根拠や成果の提示を常に求められ、援助行為が萎縮する傾向がみられます。例えば、「虐待」にも虐待・被虐待関係が逆転しかねない裏話が隠されていることがあります。科学的な評価のみならず、クライエントとの「関係性」や「語り」を大切にし、理性と感性のバランスを維持することが「対人援助の持続可能性」の鍵になりそうです。

「認識」は、仮説が検証されればひとまず終了し、その認識を通じ知識を獲得し蓄積するのが「科学」です。一方、「思考」は外から与えられた目的や終りはなく、目に見える成果や答えをもたらすこともありません。思考がその生産物を永続させ、人から人へ伝えられて行くためには、事物とそれを加工する制作が必要です。「問題から離れられない人が当事者」であり、その声を伝える「語り部の役割」は、「語りの意味」により形作られ永続されます。（牧野、上野）

この「語りの意味」について補足します。私が、ここにいる誰かに「本間さんは、何で広島に来たのですか」と聞かれて、「新幹線で」と答えても、それは答えにはなっていません。あるいは、「私は昨年、新潟で大会を主催しまして、2020年から学会の常任理事で云々」と言われても、何となく分かったような、分からないような気になります。「岡崎大会長と男の約束じゃけぇ」と言われた人は、理性だけでなく感性でも「腑に落ちる」というようなことだと考えて下さい。

村本先生のコメント

私は、対人援助の長続きの秘訣から始めます。もともと、私は物事を長く続ける方かも知れません。例を挙げると、「女性ライフサイクル研究所」は、立ち上げから 24 年目になります。「東北のプロジェクト」は 2011 年から始めて、現在は 13 年目に入りました。何故、継続するかと言うと、仕事、特に対人援助職は長くやるからこそ喜びもあるからです。すぐ止めたら、種だけ蒔いて実りが得られないでしょう。「研究所」は 29 歳で始めたわけですが、5 年、10 年、15 年と経つ中で誰かと出会ったら、「あの時にこういう事がありましたね」と相手とお話ができる。これは 1、2 年で止めていたら得られない経験だと思います。そうすると、私たちが知らないところで、誰かがそれを受け止めてくれて、また育ててくれる。そのようなことが、人間同士の関係の中にはあるのかなと若い時から学んできました。そこから分るのは、「人間は、長い時間で変わってゆく」ということです。エビデンスに関する話題もありましたが、それが無くてもよいというわけにはいかないでしょう。でも、エビデンスを求めるというプロセスは、本当に短期間の「ビフォー・アフター」を比較することにつながりかねません。例えば、子育てや学校教育においても、「これをやって、以下のような成果が出れば成功である」みたいな話で、「これをやって失敗はない、うまく行かないことは考え難い」というような結論になる。でも人間に係ることは、私は臨床心理学でカウンセリングを続けてきていますが、虐待や DV の現場にいて、話を聞いて何とかしたいと思っても、その時にはどうにもならなくて支援者たちが無力感を感じることがある。でも、10 年後、20 年後にその積み重ねで、少しずつ新しい人生を進めることが出来る。それは 20 年後に初めて分かるわけで、短い期間でエビデンスやアウトカムを求めることは、本当に出来るのかどうか。人が生きてゆく上での判断は、かなり長期的な視点で見ていかないと難しいでしょう。自分自身も含めて「一緒に生きてきたよね」といった感覚、そして「何かをするならば、長く続けないと損になる」ことがあると思います。「東北のプロジェクト」を始める時も、スタートの段階で「10 年は続けます」と宣言して、それはやはりこれくらい大きな出来事があれば、そんなに目先の月単位あるいは 1 年で何とかしようと考えても無理だったと思います。関係者の年齢などの条件も考え、まずは 10 年くらい追ってゆこうという思いでした。長く続けることによって、まずは手ごたえ、そして喜びを感じることが出来るだろうと考え、目先のことに翻弄されず、手を付けてみることが大切だと思います。

もう一つは、私自身が「科学」、特に「自然科学」をあまり信用していないところがあって、要するに原爆、原発事故、水俣病も全部科学が作ってきたことですよね。だから、「科学で生じた問題は科学の発展で解決する」と考えるのは無理があって、どんなに科学を発展させても、ある意味「人文知」というものが欠かせない。本間さんのプレゼンテーションの最後に、「倫理」という言葉が出てきましたが、科学やその産物を使うのは人間なので、人間が過ちを犯し、あるいは科学的に意図していなくとも「改ざん」ととられかねないことも起こるので、科学一

点張りでは信用できないと思います。一方で、私は東北に通って、「土着の知（地）」を大事にしたいとずっと考えて、その気持ちが徐々に膨れ上がってきました。その土地の人たちが、厳しい自然環境や災厄を生き延びる中で蓄積してきた知恵、これまで私たちが技法などを学んできた「対人援助」では太刀打ちできない程の、その土地ならではの「哲学」や「方法論」を持っている。むしろ、そのような力を引き出すことが重要なのではないかと思います。今日の午前中の「被爆樹木を巡るフィールドワーク」も素晴らしかったのですが、人間よりもっと長く存在する、人間を超える樹、森、岩などが、人間のしていることを目撃している。それらの声を、どうすれば聴きとれるのか。私は、土地の声、海の声、風の声を聞けたら良いなと思います。今日のフィールドワークがとても素晴らしかったのは、科学技術を駆使しているつもりになっている人間を超えてゆく視点、「土着の知」に根差して、コロナ禍なども同じような問題提起をしているはずなのに、人間は違う方向に向いてしまったのではないでしょうか。

もう一つ思うことは、「土着の知」を考える上で、最近は心理学でも「土着心理学」という話がありますが、そのポイントは、やはり自分の中の土着性への気づきにあると思います。西洋中心主義から一度離れて、それぞれの土着性を大事にしようという動きですね。西洋や都会に住んで、とりわけアカデミックな世界の中にいるものは、西洋の人間中心主義に感化され過ぎているので、それを超えてゆくためには、自分の中の「土着」と出会う必要があります。私が、東北に行くのが面白い理由は、そのことで双方向的な出会いがあって、自分が変化して世界が広がってゆくからです。東北の人たちの土着の在り方を見て、さらに自分はどうなのだろうかと考えてみる。対人援助の対象があって、対人援助をする自分がいるだけではなく、土着の人だけで生活していると見えてこない、異質な存在が入ることによって、「多様なもの」が出会うことで、自分の中のそれまで見えていなかった「あるもの」が見えてくる。きっとそれは、出会った相手方の方にも見えてきて、そのことでそれぞれの世界が広がってゆくのでしょう。それは非常に楽しい経験だと思います。

研究所を開設する前は、「自分が楽しければよい」という気持ちがありましたが、その点については、明らかに改善したと思っています。でも、何のために研究をするのか問い直してゆくことも大事だと思います。研究の途上で沢山の仲間と出会うことで分かったのは、私が 10 人いたとしてやれることと、私以外の 10 人の仲間と一緒にやれることは想像以上に違っていました。想定を超えていたわけですが、想定を超えたからこそ、一人で同じ期間にできたこととは別のことができたのだと思います。自分とは違う人たちと一緒に物事をやる中で、自分の中に新しい世界が広がり豊かになる、その喜びが仕事の楽しさでもあり、年を重ねることの楽しさでもあった。「苦行」ではこの喜びや驚きは得られませんね。これらのことが「対人援助の持続可能性」につながって行くのかなと、私は思います。

中村先生のコメント

「打ち合わせ」はせずに、ライブで行きましょうということだったので、対人援助学

会らしく、討論ではなく対話で行きましょう。私は、以前から本間さんを「この人は一体、何者だろう」と思うことがよくありました。どんどん、整形外科医から遠ざかっているような気がしますが、まあここは整形外科の専門分野の話をしてもらう場ではないので、余白の部分と言いますか、それ以外の部分の話を聞くことになると思います。そうすることで、本間さんの人間そのものが見えてくる。今のプレゼンテーションやお手元の資料のように「博引傍証」することと、整形外科医としての立場が全く違うということではなくて、例えば、患者さんに手術をした後に、リハビリということがついてまわるので、そのことを意識されたり、学んだりする時間が必要ですよね。整形外科医としての専門的な話しだけでなく、そのあとの「回復」なり、リハビリのことが視野に収められているだろうから、こういう博引傍証をせざるを得ないのだろうと思います。医療者としての実践、臨床医としての専門性とはまた別に、つまり「縦」に医学を深く掘り下げてゆく専門性だけでなく、「横」に上手くつなげてゆかないと患者さんにうまい具合に近接できないとご自分で考えているのかなと推測しています。縦に深めてゆく専門性と、横につなげてゆく現実、臨床医としての縦と横なのだけれど、縦と横だけだと、どうしてもグラグラするので、「斜め」の部分が必要になる。斜めを考える時に、これは村本さんのお話にも関係するのですが、自分との関係、他者と言うか対象を設定して理論を考えたり援助設定したりする。その時に、「私」という存在が深くかかわってくるのだろうと思います。本間さんの博引傍証の仕方が、そういう世界のものを引用しているような印象を受けます。本間さんは、これまでも「阿闍世コンプレックス」や「傷ついた癒し人 Wounded healer」など、ここにお集まりの方たちなら、それに反応してくれると思いますが、そのようなことについて対人援助学会で発表しています。京都ではスピリチュアルな世界に関心を持たれたりもして、本間さんには「『私』というものに対する関心」が欠かせないのだなと感じていました。さっきの縦と横ですが、横でコメディカルや異分野の方とつながりながら、医師としての臨床の根本に立ち返ってゆくことも必要なのでしょう。

対人援助学会の HP にも書いてありますが、学会を一緒に作ってきた、残念ながら、もうお亡くなりになった「望月昭先生」は行動分析がご専門ですが、心理学の専門家と言うより、今の「横のつながり」を活かして、他の分野の先生方と「研究だけでもなく、実践だけでもなく」と、常に考えていました。「では、それは何か」ということを究明したくて、私も 15 年間この学会の活動を続けてきました。そこに「対人援助」というプラットホームを設定すれば、一定のものが見えてくるのではないかと思って、その中でのアカデミーだけではなくて、実践を内蔵すればよいというわけでもない、これをどう両立しようかと思いながら、こんなことを考えていました。

「家族支援」の文脈で、里親さんとか社会的養育のことがテーマになっていて、ひとりひとりの話しを聞いてみると、実にいろいろなことが行われています。「研究でもなく、実践だけでもない」ということを、いつも考えている例として、あるケーススタディで里親さんがこんな話をしてくれたこと

があります。小学校に上がる前の 6 歳の男の子が、社会的養育のところで、実親さんに難しい課題があっても、実親さんに対して通知したり、その方が「知る権利」があったりして、たとえ実親さんが服役中でも真実を何とか伝えてゆく方が、知らされないより良いだろうと考えざるを得ない。そうなると、お子さんと実親さんをどう関係づけて行くのかという問題があります。そのお子さんのお母さんに少し問題があって、養育できずに離れている訳ですが、いずれは再養育してもらいたいと考えて、時々は面会してもらったりもしていました。そのお子さんは、6歳だからだいたいのことも分かる。里親さんのもとで苛立つようなことがあると、実親さんと過ごした家に帰ろうとする。そんな時に、里親さんが「よし分かった、家出をしよう」と言って、家出を手伝ってあげることになったらしいのです。だいたい、家出を思い立つ時間は、3時ころに学校や保育園が終わって帰ってくる4時半前後が多い。で、家出するなら3日分くらいの準備が要るだろうと、秋なら夜は寒いので、靴下・パンツなどの衣類、水もペットボトル3本くらいリュックに詰めると荷物はかなり重くなります。「大変だろうからお母さんが家まで送ってあげる」と里親さんが公園まで送って行きます。4時半頃にもなると外は暗くなって、「お腹がすいてきたよね。どうしようか」とお母さんが聞いたりして、1時間くらいドライブを堪能して、「じゃ、仕方がないから家に帰ろうか」ということで帰宅する。この、「家出ごっこ」がその子の自立を促す結果につながってゆくことがあるのです。「家出をしたい」というその子の意思を尊重して、里親さんが「手伝ってあげる」と言い、実行し、そのあとの時間を堪能する。そういう、分かってはいるけど、ある種のパフォーマンス、実践をすることを里親さんがうまくおこなってくれている。この話は、本間さんの話しのどこにつながるかと言うと、「生活世界」という言葉が出て、その中での暗黙的で、特にセオリーがあってやっていることではないけれど、このような子に合わせてケースごとに実践してゆく。これを暗黙知で終わるのではなく言葉にして、今度は人に伝えられるような作業をしてもらう。そういう意味では、セオリー的なある考えを体系化・言語化・社会化していきたいなという思いもあります。こういうケースは、非常に多いと思います。先ほど、私が話に出した「斜め」の部分につながる点について、後でお話があると思いますが、本間さんの結語にもある大事なことなのかなと考えます。そういう意味では、朝の「被爆樹木を巡るフィールドワーク」もそうですが、この場合は、科学が良識的に作用していました。樹木の爆心地に向かっている場所は、そちらに傾いたりして弱くなっている。それに対して、樹木医が行ってくれていることが科学的で効果的にはたらいている。やはり、「科学」も必要なことだと改めて考えさせられました。先ほどの、家出を手伝うお母さんの話しを言葉にして、コンセプトにしてつなげてゆくと、全く新しいタイプのいろいろな理論ができると思っています。そこと被爆樹木の真相を究明し伝えようとした科学者たちの力とか、「倫理」と言いましょうか、自然中心にみてゆくといろいろな考え方がつながってきます。

毎年、「対人援助学会」として違うテーマで大会を開催していますが、最終的には「障

害者の権利条約」を作ってゆく過程で、「私たちのことは、私たち抜きで決めないで欲しい」という意見がありまして、当事者中心と言ってもよいと思います。そういう中で「研究だけでもなく、実践だけでもない」ならば、中心をどこに置くか。よく考えて、概念上は「倫理」と言えば「倫理」ですが、そういう世界を表現しつつ、自然というところに視点が返ったように思います。

いつも、本間さんが示してくれる考えを聞いていると、本間さんはどこに向かってゆくのかと考えております。

以上がワークショップ１の前半部分です。この後、参加者は幾つかのグループに分かれ、「バズ・セッション」で本間、村本先生、中村先生の発言を踏まえディスカッションし、代表者が発表して下さいました。

A さんの言葉

私は、以前ベトナムの同世代くらいの女性が、他の女性と話をするときに相手の年齢がよく分からない状態で、「おばあさん」と話しかけていて驚いたことがあります。日本は、「若いから良い」という感覚があって、もちろん高齢者に対する敬意もありますが、そのような状況の中で、ベトナムの方たちが「年齢を重ねること自体への敬意」をとても大切にされていると知って感動したことがあります。今日のお話もそのことと関係していて、「若さ」はもちろん素晴らしいけれど、自分自身が年を重ねてくると、ベトナムの方たちのような敬意、気持ちは大切だなと思います。一方で、年を重ねるからこそ見えてくる、世界や自分との関係性も体感していて、こちらも良いことだなと思います。今日の話しの中で、そのことが心に響くような感じでよく分かりました。多くの大学生は 20 代、22 歳前後で卒業してどんどん新陳代謝が進む一方で、大学に残る私は年を重ねるので学生との年齢差が離れ、若い方をまぶしいと思う時期がありました。でも、今の年齢になり「まぶしいだけではない自分」になって来たような気もしています。日々の授業にも同じようなことがあって、「単位をとる」というだけでは学生も面白くないと思います。神妙な顔をしていますが、「つまらないな」と考えている学生もいるかも知れないです。でも、授業を受け続ける中で理解が深まっていくことがあるので、面白くなくてもとりあえず継続してゆくことが大事だと思います。それは、授業を通した学生との関係に限らず、年齢が離れて行って、お互いに断絶を感じることがあっても、ひとまず先生の話を聞いてみる、こちらもひとまず学生の話しを聞くという姿勢を保つことで、互いの理解は深まると考えています。今日の話しは、そのようなことを全て包括してくれるような内容でとても楽しかったと思います。

本間の応答

今のお話の前半部分に対してですが、私は適切な言葉をインストールしてゆくことがとても大切だと考えています。例えば、病状説明の時、患者さんはご高齢の方が多く、説明を聞きに来るのは、ある程度の年齢のお子さんやそのお嫁さんたちが殆どです。その場合、患者さんをどう呼ぶかと言いますと、私は「お父様、お母様」ですね。それで嫌な顔をする方はいません。「おじいちゃんは、おばあちゃんは」と言っている医師もいますが、「お父様、お母様」というところ

から話をスタートするのは、とても大切なことだと思います。でも、20年くらい経つと言葉を取り巻く状況が変わってくる可能性はあります。基本的な姿勢、敬意は変わらないけれど変化には敏感になる必要がありますね。世代が離れている人たちとの協働作業は興味深いことだなと私も実感する場面が多いです。先ほど、村本先生が挙げられた「土着性」に関連することですが、私が勤務している病棟に 20 代前半の看護師さんがいて、祖父にあたる方が「村長さん」ではなくて「ムラオサさん」で、「陰暦何月に、こちらの方角から風が吹いてきたら、向こうの山の 3 合目の祠に定められたお供えをする」というような、膨大な先祖伝来の情報を持って実行している。そういう人たちもいる、のではなく、そういう人たちが仏教や神道以前のアニミズムを大切にして新潟でお米を作っているのです。

B さんの言葉

我々のグループは「対人援助に必要な知について」、本間さんが指摘されていた「理性と感性」について話し合いました。「どちらかだけではだめだよね」というのは、対人援助職ならば当然のことですが、今回のテーマのように「持続可能性」も考えに入れた時に、「理性的な知」は相手に伝えやすいし、広めやすいし、結果として持続しやすい。一方で「感性」の方は、自分以外の周囲に伝えてゆくのが難しいだろうと思います。どうしても、それを伝えようとすると「理性的な言葉」になってしまい、それを聞く側も難しいだろうなと話し合いました。「感性」はとても範囲が広くて、その広さが伝えることの難しさにつながってゆくのだと思います。それを深めてゆくためには、まず対話を深め、興味や好奇心を持たないと理解や共感が出来ない、相手の言うことを迷信だとかオカルトだとか言って忌避してしまいかねないので、相手の言葉を興味と敬意をもって拝聴する姿勢が必要だと意見がまとまりました。

C さんの言葉

私たちのグループでは、「里親さんのエピソード」が面白いという話題が上がりました。その子が家出をするところで、ついつい説得したり、「そんなこと言わないで」と引き留めたりしがちだと思いますが、いろいろ考えて「その子の気持ちに寄り添う」というか、多くの人が長く生きて初めてそういうことが見えてくるのかという意見で、私も共感しました。いろいろな人と出会って、この年齢になって、初めて本当の意味はこういう事だったのか、家族は変わるよねと理解することが出来ました。長く付き合って、少しずつ変わって、そこは違っていたのですね、と気が付いて返すことが出来る。人は、短いスパンで考えても分からないことが多いものだと確信しました。

【まとめ】

村本先生から

皆さんの話しに少し補足をさせてもらいます。対人援助者として感性を磨くことはすごく大事だと改めて思いました。対人援助は「個別」に行うものです。同じクライエントに対しても援助者によって、援助の中身は変わるはずです。ということは、皆が援助を個別に作って行くしかないということになります。この力を鍛えるのは、身体性が

とても重要だと思っています。渡部さん（記念講演 渡部朋子さん「私が被爆者から受け取ったもの—それぞれの『物語』を通して」）の話しがとても印象深かったのですが、今年も福島に行って印象的なエピソードがありました。ひとつは、飯舘村でずっと語り部をされていた著名な方の娘さんが語ったものが出版されて、娘さんも最近亡くなられました。その裏話を聞いてみると、お母さんがとてもうまく民話を語るのを娘さんは聞いていて、お母さんが亡くなったとたん、お母さんと驚くほど同じように民話が出てくる。もうひとつは、浪江から避難をしてきた男性のお父さんが焼き物、「相馬焼」に馬の絵を描きつけるのですが、お父さんが亡くなって、その経験が無い息子さんが頼まれて描きつけてみたらこれが出来た。意識して練習したわけではないけど、ずっと近くにいることで身体化されていた。これが伝承ということなのかなと思いますが、そういう意味で、私はあちらこちら国内外にフィールドワークに行って、自分の身体をその場に置いて初めて感じるもの、出会いがあると感じています。そこで、自分の中にある「土着」に出会い直したことでもあったわけですが、例えば東北に行って驚くのは、津波があった時に、漁師さんたちには伝統的に「沖出だし」という方法があって、津波の前にもっと沖まで船を出して、2・3日待ってから帰る。凄くリスクがある行為で、タイミングが合わないと津波に呑まれてしまうこともある。それはすごい判断で、「沖出だし」をするかしないか自分で判断するしかないわけです。自然とともに生きている人たちは、結局は自然の具合と自分の身体で動くということが日頃から鍛えられている。福島の原発事故があった時に、ここからは避難する必要が無いと言われた地域の人も避難した人がいて、その方たちは十分な補償がなされていないのですが、逆にここは危険だから避難した方がよいと言われた人たちの中に、認知症の奥さんを動かすことは出来ないなど、トータルで考えたら避難しないで住み続ける方が現実的だと判断した人もいるわけです。その判断に対しては、私は尊敬というか、なかなか判断が難しいと思うのですが、各自が責任をもって判断している。対人援助職者としては、人と向き合ってこの関係の中で何ができるかということを自分で考えなければならない。そういう意味では、第一次産業で体を鍛えている人は、自然に考えることが出来るけど、「知的に生きている」と自覚している我々は、ある意味、弱い面があると思います。皆さん、どうかしら。

中村先生から

本間さんがね、その辺について結語（後述）で言及していることにも関連すると思います。この学会を設立してゆくプロセスの中で、立命館大学の人間科学研究というものが背景にあって、「実践でもなく、研究でもなく」という過程で、レッスンの基礎もなく、学会を単なる議論のプラットホームにすることで、いろいろな人たちが集まってくるだろうという期待があった。本間さんが結語2で述べているように、変に理論化する必要もないのだけれど、大学や学会ならば「研究としての体裁」を備えているということも必要になってくるので、なかなか厄介な問題がある。学問の世界に参入する、学問の世界で表現するとしたら、村本さ

んが言われたような問題も生じてくる。ですから、こういう場が必要になってきます。

最後にOさんという、もとはソニーの技術者をされて、あるアニメーションの音楽を制作された方について話します。この人が、熱帯雨林に昔のアナログの録音機材、テープレコーダを持ち込んでみたら、熱帯雨林の森の中は相当にやかましいらしい。ところが、それが「ノイズ」に感じない。それはなぜだろうと考えてみたら、アナログの機械にしか聞こえない、人間の聴覚では拾えない領域の、高低音域の音が入っていて、それを分析すると波形で見えてきて、それがむしろ「ノイズ」を吸収していることが分かった。つまり、人間が知覚して理解できる範囲外のことが熱帯雨林では起こっているので、相当やかましいけれど、街中の喧騒みたいなノイズをリダクション（削減）する、人間には聞こえないものがそこにはある。なので、そこに人間が行くと心地よくなる。つまり、我々は環境によって生かされている。「音の力」と彼は言っていましたが、「対人援助」もそれによく似たところがあって、そこを理解して共有することを大事にしたいなと私は思います。余白や阻まれる部分もあるかも知れないけれど、ホリスティック（全体的）な側面では、対人援助は「見えない、聞こえない、分からない」けれど、そこに特化しているような、何と表現して良いか分かりませんが。しっかりしたアート的な部分は必要なのでしょうね。

本間から結語

有難うございました。私、まとめようかなと思っていたところを、ほぼ中村先生に言っていただきました。**結語 1** ですが、今回の大会と、このワークショップ1のテーマについて考えてみると、「画一的で、その場限りの対人援助」を目の当たりにして問題意識を憶えている方は少なくないだろうと思います。あと、現在は行政に対しても定期的な成果報告をする必要があって、対人援助職も「PDCA サイクルを回せ」みたいなことばかり言われるようになりました。またスタッフの意識調査やクライエントの満足度調査を行っている組織でも、何かしらの方向性のある気付きを求められていることがあります。**結語 2** として申し上げたいのは、もし私が社会人大学院生になったらという仮定をして、どのような形で「研究」を進めなければならないかという問題があります。中村先生も指摘して下さったように、修士や博士の資格を目指すか否かは別にして、やはり「一定の体裁を整えて」研究を進めなければ、研究として成立しなくなるのは仕方がないのでしょう。**結語 3**、これで最後のまとめになりますが、このテーマに沿ったキーワードって何だろうと考えまして。対人援助の「品格」ではないような気もするし、やはり「良識」なのかなと考えました。「多様で持続可能な対人援助」には、裏付けになる科学は当然必要だけど、その科学を基礎づけ、包摂する、自他の経験や感性に基づく「良識」が求められる。「良識」がある人は、自分と他者、社会を尊重して、時には妥協することはあるが、根本的に嘘はつかない。また、対人援助にもある程度の効率が求められますが、ジェレミー・ベンサムやジョン・ステュアート・ミルなど「功利主義者」が言っているのは、「全ての個人が一人として数えられ、如何なる個人も一人以上としては数えない」ということがその

大前提であると。この前提は、対人援助学会に入会する前から私も薄々と感じていて、入会して確信を持った「対人援助に物象化は禁物」、人をモノとして扱ってはいけないということにつながります。「物象化」については、ご自分でも調べていただきたいのですが、ジェルジェ・ルカーチが言い出して、カール・マルクスやハンナ・アレントが応用したという説がありますが、私は紀元前 400 年頃に活躍したプロタゴラスがオリジナルなのではないかと秘かに考えています。例えば、漢詩で「寒流月を帯び、澄めること鏡のごとし」と言われても何のことかよく分かりません。でも、その状況を裏返して、「生暖かい濁った川には月など映ることは無い」、つまり「自分のこころを冷たく清らかに澄んだ川のようにしないと師の教えも伝わらない」ということを表現しているという、ひとつの解釈が成立します。プロタゴラスの言葉を裏返してみると、その言わんとするところが自ずと分かるのではないでしょうか。エブリバディ、サンキュー。